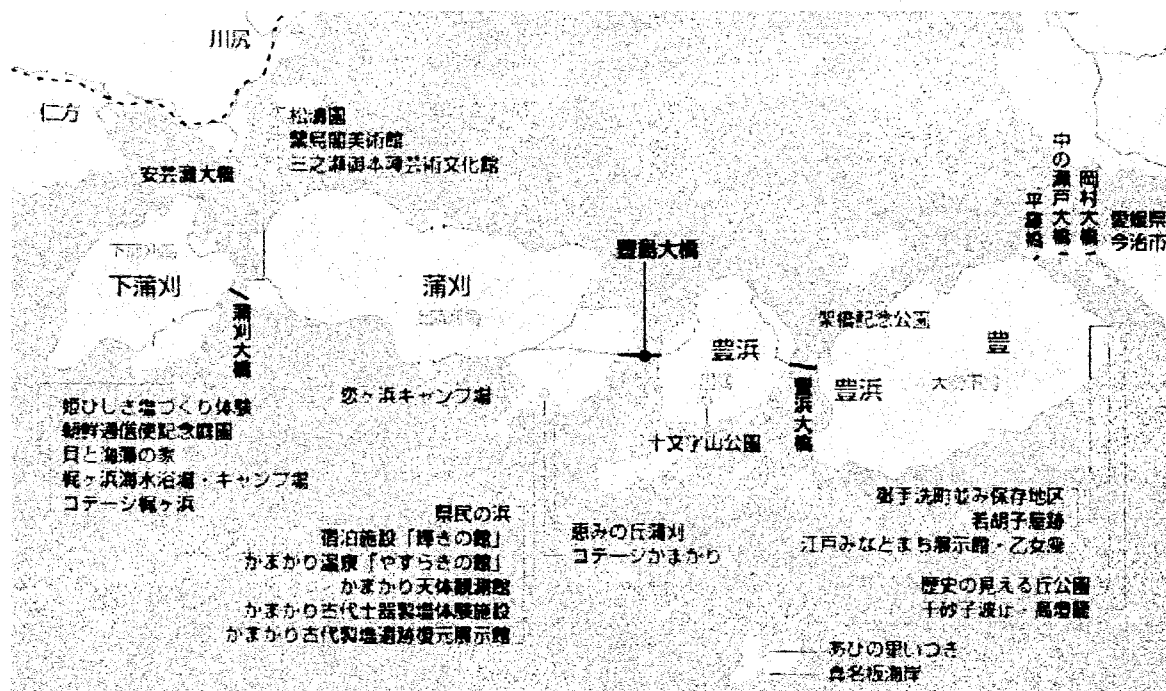


5月バス例会

安芸灘の潮風に吹かれて

～下蒲刈島と大崎下島を訪ねる～



2010年 5月16日(日)

備陽史探訪の会 種本実

〔本日の日程〕

集合……………7時30分

出発……………7時45分

すなみ海浜公園 ……8時30分～55分(トイレ休憩)

竹原……………10時(コンビニにて短時間のトイレ休憩)

白雪楼と福島雁木、武家屋敷など見学……11時10分～11時40分

三班に別れて見学

豊島公民館……………12時20分～13時 昼食

御手洗駐車場着……13時30分

町並みを見学……………13時30分～15時30分

天満宮—金子邸—若胡子屋敷跡—松浦時計店—乙女座跡—江戸みなと

まち展示館—恵美須神社—七卿落遺跡—輛田邸—船宿—住吉神社—千砂子

波止—星野文平の碑—満舟寺—常盤通り—旧柴屋・潮待ち館

御手洗発……………15時45分

福山着……………18時30分

☆ 以上は大まかな目安です。天候などにより多少の変動があります。

○呉市川尻から大崎下島の御手洗までの架橋

安芸灘大橋	—	下蒲刈島	—	蒲刈大橋	—	蒲刈島	—	豊島大橋	—	豊島	—	豊浜大橋	—	大崎下島
安芸灘大橋		2000年1月18日		開通		橋長		1,175m						
蒲刈大橋		1979年10月		〃		橋長		480m						
豊島大橋		2008年11月18日		〃		橋長約		903m						
豊浜大橋		1992年11月30日		〃		橋長		543m						

更に大崎下島と平羅島を繋ぐ橋長 98.5m の平羅橋（へいらばし）、中の瀬戸大橋・岡村大橋をととも、安芸灘オレンジラインの愛称で知られる。

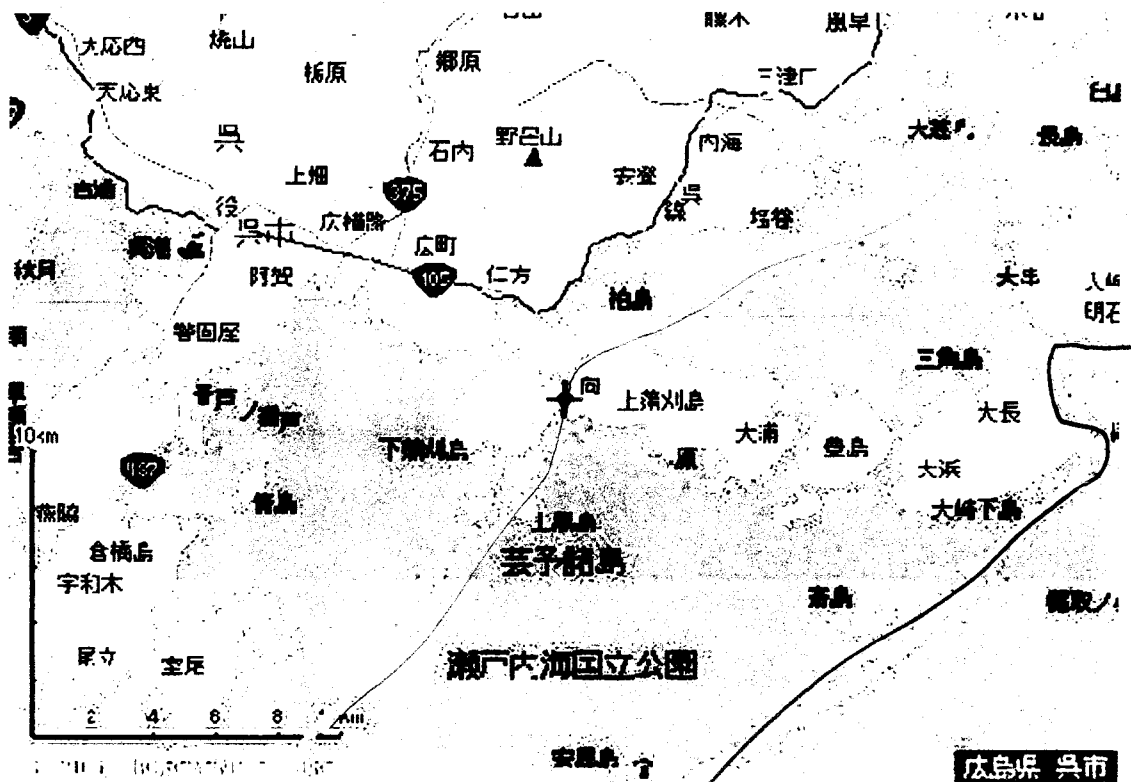
■下蒲刈島・・・平成15（2003）年4月に呉市に合併した。周囲16Kmの島で江戸時代に、本陣、番所、茶屋の3点セットを備えた「海駅」に指定された。慶長12年（1607）から文化8年（1811）の間に12回におよび朝鮮通信使が来ており、その時は朝鮮通信使からの船6隻に対馬藩の船が40隻随行し、12回目を除き下蒲刈島の三之瀬に船を寄せ一泊した。また、西国大名達の往来でも賑わった港まちである。下蒲刈島は、海上往来の激しいこの地は、潮の流れの複雑なことでも有名であり、昔の船の関係者はその激しさの順に山口下関を「一之関」、上関を「二之関」下蒲刈町三之瀬を「三之関」と呼んだ。

■朝鮮通信使・・・朝鮮通信使は12回のうち11回往復ともに三之瀬に寄港した。浅野藩では、第8回の来日に警備や輸送、出迎えのために135隻の舟と接待役付759人を三ノ瀬に用意した。港の整備、本陣、御茶屋の新築、往復で改修するなど力を入れていた。住民に対しては触書を発している。第11次朝鮮通信使は”波止場と栈橋が、上関、下関よりはるかに優れていた。栈橋の左右の欄干には赤い毛氈が敷かれていた。”と、また”安芸蒲刈御馳走一番。其の飲食器皿も皆金色。日本好酒皆此州。安芸州之酒味為日本第一。”等と記録されている。このように日韓両国の資料から、浅野藩が想像を絶するような饗応をしていたことが伺える。

明和元（1764）年の第11回朝鮮通信使節を最後に、又17世紀後半から木綿帆が使われるようになると、船は蒲刈島の沖を一気に駆け抜けるようになり、三ノ瀬の港は衰退して行った。ここに代わって大崎下島の御手洗港が潮待ち、風待ちの港として栄えるようになった。

瀬戸内海航路は、中世までは殆どが陸地に沿って航行する”地乗り（伊予・津和地島〔現・松山市〕から安芸の海域に入り、倉橋島南端を経て、下蒲刈島の三ノ瀬に寄港し、豊田灘に入って山陽沿岸を、竹原、三原、尾道を通して鞆ノ浦へ至る）”であった。

ところが近世になると、航海技術（木綿帆、地図、計器など）が進み。瀬戸内海の中央部の最短距離を行く”沖乗り”航路が利用され始めた。沖乗り航路は、伊予・津和地島から斎灘を一気に渡り、鞆ノ浦へ向かうものであった。途中潮待ち、風待ちをする港が必要になり御手洗が栄えた。



『太い線が沖乗り航路』

■白雪楼(はくせつろう)



置を施し、ここを漢文研鑽の本拠にした。その時には京都から移築した茶室と水屋はもとの形のま

白雪楼は備後国・沼隈郡藤江村に住む豪農・山路家の7代目・山路機谷(やまじきこく)が嘉永年間(1857~1864年)、に海に臨む自宅近くに営んだ数寄屋(すきや・茶室)。機谷の祖父にあたる山路重好は風流を愛し、安永(1772~1781年)のころから年の半は京都の黒谷で暮らし、文人墨客と交わる生活を送っていた。重好の死後、機谷の後見として岡本(屋号)山路に入った機谷の父・重信は義父の黒谷の別荘を藤江に移し、奇好亭(きこうてい)と名づけ、文人墨客との交流の場に当てていた。早くから漢詩の研鑽に勉めていた機谷は、奇好亭を楼造り(二階建て)に改めたい希望があったようであり、天保14年(1843)の父の死後ほどなく、奇好亭を改築して楼造りとし、階下の5畳に壁が移動して通路になる「様変わり」の装

山路機谷は明治2年に没し、その後山路家は事業に失敗して逼塞し、家屋敷も人手に渡ることになり、白雪楼は機谷と親交のあった竹原の頼家九代・俊直が買い取って、明治25年に竹原の小路

に移築した。この移築に当たって、頼俊直はかねてから自宅にあった浅野藩五代藩主・綱晟（つなあきら）が別荘の木壁に彫って愛玩した、蘇軾（そしよく・中国、北宋（ほくそう）の政治家、文学者）の「醉翁亭記（すいおうていき）」の壁板を、楼の天井に揚げ、これを保存していた頼杏坪（らいきょうへい）の題記を壁の腰に貼り、別荘の名前も「留春居（りゅうしゅんきょ）」と改めた。三之瀬の留春居にあるのはレプリカで、実物は竹原の頼家に保存されている。平成5（1993）年に至って、頼家は家人の住居として留春居の敷地を利用する必要が生じ、建物は旧形を保存することを条件に、下藩刈町に移築された。

※山路家の先祖・・・・山路家の先祖は北畠氏と云われる。購ヶ岳の戦いで、秀吉が柴田勝家と戦ったときに、秀吉軍から柴田軍に寝返った山路將監正國という者がいた。戦は羽柴軍の勝利に終わり、敗軍の将・山路正國は加藤清正に首をとられた。この正國の遺児・孫三郎之光という者が藤江の山路家の祖と云われる。

之光は、父の仇の清正を討とうと肥後國（熊本県）に向かう途中、備後國鞆津までやってきたが、清正が毒殺されたと聞き、目的を失ってそのまま鞆津に隠棲したという。天正19年に91才で亡くなり、之光は、二代之次（慶長12年歿、享年75）と共に鞆津南光山に埋葬され、藤江村に移ったのは三代目からのようで、三代から代々藤江の念仏院に葬られている。宗家の屋号を「表」と云い、株家17軒にも及ぶ大族となった。

山路家の名が高まったのは、分家の岡本山路家が藩から貞享3年に松永湾の漁業権を得てからであり、「福山のお殿様十万石、岡本の財産十万石」と囃されるほどの富農になった。岡本山路の六代重敏は病弱であって嗣子がなく、分家・吉本山路の二男・熊太郎重済を養子とし、七代山路を継がせた。この熊太郎重済が山路機谷である。竹原移築時に白雪楼が変更された箇所は、東側床の間裏の柱が半間間に立っていたものを1本置きに出柱にしたことと、2階6畳の天井を4畳半分取り外し、そこに蘇軾の「醉翁亭記」の刻板をはめ込み、もとの竹編みの天井3畳分を玄關の天井に転用しただけである。江戸時代の住宅の多くは、厨子二階と呼ばれる小屋組を取り込んだ中二階の形式をとる。

茶室の正面けらばには楠の変木に「流水無月夜」と刻まれた扁額が掛かっており、留め金が棟東に固定されて、建立当初からの扁額であったと思われる。

山路機谷は私財を投じて幾多の社会福祉事業に貢献する。文政3年（1820年）3月には、金江村藁江峠を拓き茶接待所を設け、またいつのことも藤江村に八反休憩所を、さらに藤江村七廻り休憩所を、そして千年村能登原峠休憩所を設けた。海においては、播磨から下関に至る瀬戸内海の各所に暗礁標識を設けて航海の安全を図り、藤江の浜には港をひらいて海運の基礎を築いた。藤江村オ戸には井戸を掘削し飲料水や用水に供給し、旱魃に備えては池を開いた。

金江町の岡本池は、機谷の義父・山路重敏が私財を投じて文化15（1818）年に完成した池である。時の福山藩主・阿部正精（あべまさきよ）は彼の功績を称え、翌年、菅茶山に命じて池の来歴を書いた石碑を建てた。現在は堤に遺る。

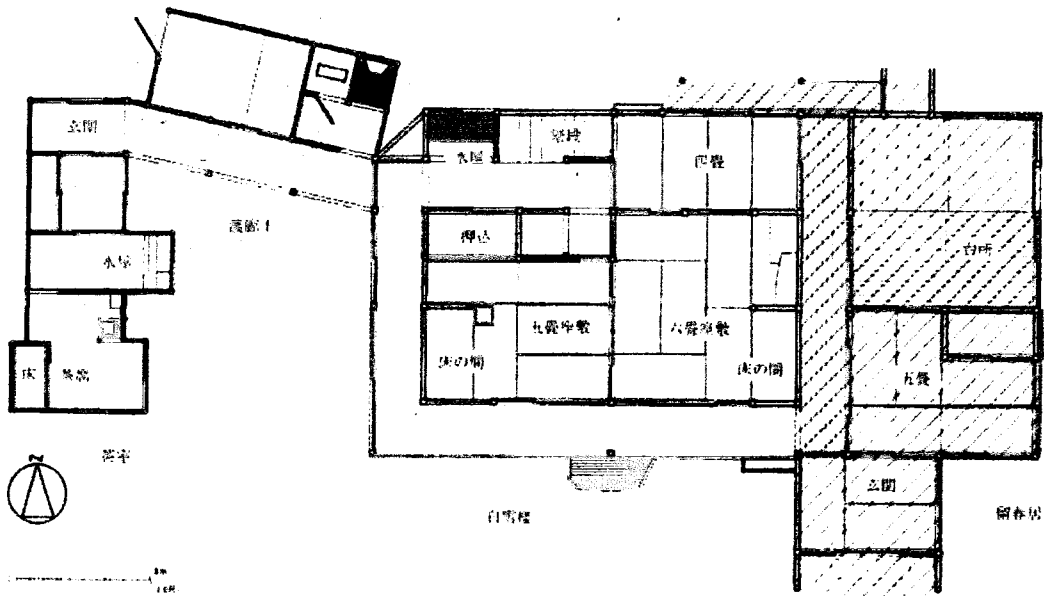


図1 全平面図

留春居の平面は図1に示した通りである。このうち東側にある台所と玄関および廊下は、竹原に移築された時に付け加えられたもので、六畳の座敷の北にある四畳の裏側の柱間装置、および茶室への渡廊下の裏側の便所と風呂場は移築時に改造されている。したがって白雪楼の建物は、図中斜線の部分を除いたところであり、沼隈にあった時は、四畳の東に入り口らしい突き出しがあり、竹原移築時に撤去された以外は、古い形態をほぼ保っていると見てよい。

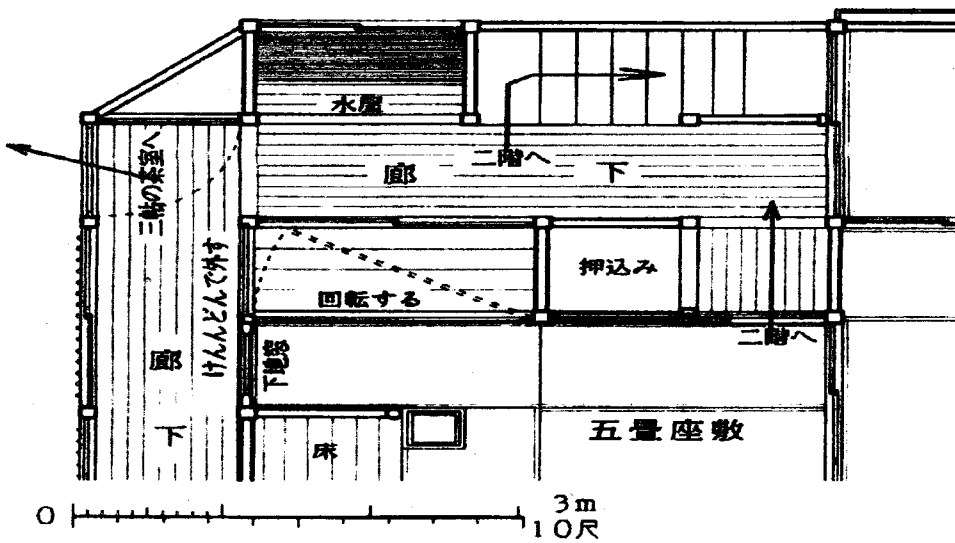


図2 階下五畳の可動壁の仕掛け

白雪楼は全体が数寄屋造りになっているが、特徴的なのは階下の五畳の柱間装置と、その上の階の楼造りになった六畳の座敷である。一階五畳は竹原移築時に東側に玄関や台所が設けられたために、通常の民家の座敷に当たるところに位置しているが、白雪楼として独立していた時は、東隣の六畳が座敷であって、この部屋は茶室への待合の性格を持っていたようである。なぜならば、奥の西寄りの一間の壁が回転するようになっていて、ここを開くと西の茶室へ連続する通路ができる仕掛けが施されているからである。この押込の西壁を取り外し、南壁を回転すると、その裏（北側）には廊下を隔てて水屋があり、その東脇には二階座敷に上がる階段、西は三畳の茶室に至る廊下になる。そのような位置関係から、この仕掛けは茶会などの折りに五畳座敷を様変わりさせる目論見であったと考えられる。白雪楼と茶室は江戸時代後期に京都に建てられ、その後広島県の培養、竹原、下蒲刈と三回の移築を受けた建物である。このような運命にもかかわらず、茶室部分は当初の形式をほぼ完全に保っている。残念ながら畳と障子は散逸してしまっているが、茶席の形式は客席に横畳台目（茶室の畳で、普通の畳の約4分の3の大きさのもの）二畳を持った三畳の茶室という珍しい形式のものである。

※見所・・・五畳の座敷の天井には、赤松の棹縁に薩摩葎（さつまよし）がはられてある。また床脇の一間の壁が回転し、押し込みの側壁も取り外せ、茶室と二階への通路となる。二階へ上がる階段は、直角に曲がり、間に戸棚を設けている珍しい造りである。天井には蘇軾の「酔翁亭記」を彫った板がはめられている。

■福島雁木



福島正則は幕命により本陣を設ける際、船着の便をはかって長雁木を築いた。最初は現在の少し前方に、垂直に築いたが一夜の内に潮流によって崩壊した。再び築く時には、中程に折れ目を入れて、現在残っているものができあがったといわれている。雁木は、潮の高さに関係なく船から積み下ろしができる階段状の物揚場。

最初は11段で、昭和になって地盤沈下等によって、上部3段がつけ足され14段となった。長さも、約113mあったものが埋立工事等により、約55.5mと短くなっている。長雁木の西隣に長さ5.6m、17段の対馬雁木があったが、現在は県道拡幅工事のため見る事ができない。これは、朝鮮通信使来日の都度同道した対馬藩主宗氏の専用の石段といわれ、宗氏の宿舎であった本陣の前に位置していた。江戸時代浅野藩は、ここを公の繋船場として、番所や本陣や上下の御茶屋を常備した。番所には繋船奉行のもとに定数の船頭、水主が常備され、番船や水船などがいつもつながれて、海上の守りについた。本陣は港に接し、浜本陣の形態を整えて諸大名の宿泊に利用された。上下の御茶屋は、朝鮮信使の来朝、琉球使節の参府、オランダ人の江戸参礼の際宿泊接待所に当てられた。

口伝によると、これら雁木部分から汚水等が直接流出しないように、水路を曲げる等の工夫が施されているといわれている。

■武家屋敷

建築用途 武家
構造形式 木造厨子2階建切妻造 本瓦葺
建築年代 江戸中期（推定）

下蒲刈島は川尻町の沖合いにあり、島東岸に位置する三之瀬地区にM家はある。三之瀬は古くから内海航路の要衝として海駅を設け、船泊で繁栄したことで知られている。

江戸時代に朝鮮通信使や参勤交代の藩主などが江戸往還に三之瀬に立ち寄り宿泊した。宿舎は浅野藩が準備し、今は現存しない上の御茶屋、本陣などがあてられた。当家は古地図によると下の御茶屋に隣接していることから浅野藩の役宅として使われていたと考えられ、下蒲刈町三之瀬に残る唯一の武家屋敷である。

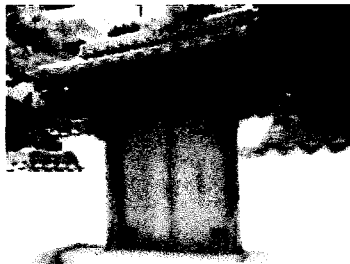
間取りは正面下手の通り土間の奥に釜屋を設け、座敷は2列7室の部屋を配し、前列下手から表ノ間、玄関ノ間、上ノ間とし、後列下手から板ノ間、納戸、中納戸、奥納戸と配置している。上ノ間は鴨居に杉棹縁天井に至るまで全て黒弁柄拭漆塗りの数奇屋意匠に仕上げ、その他の部屋は天井に黒弁柄塗り仕上げとしている。

当家は建物の割に式台玄関、玄関ノ間を広く設け、奥納戸の押入にある隠し箱階段とその下部にある隠し地下穴蔵を備えているのが特徴的で、数少ない江戸時代中期の武家役宅の間取り構成を知る上で重要な遺構である。なお数年前から下蒲刈町の観光スポット、侍屋敷として一般公開されている

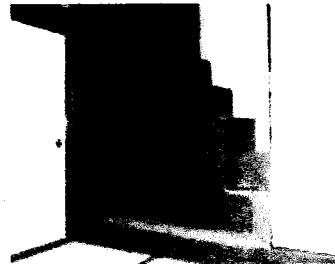
M家は明治中期に曾祖父にあたる京次が浅野藩の払い下げ屋敷を購入し、現在の当主はこの旧役宅と隣家に居住している。屋敷は三之瀬の海岸道路に面し、築地塀と腕木門を構え建物を含め武家屋敷としての風格を漂わせている。主屋は厨子2階建て切妻造り平入りとし、外壁に横連子虫籠窓を取り付け真壁仕上げ（柱を外に出して、柱を化粧材として見せる形式）とする。



『通りに面した外観』



『腕木門』



『隠し箱階段』

☆以下大崎下島と御手洗については「豊町御手洗伝統的建造物群保存地区保存計画」を主に引用した

■大崎下島・・・瀬戸内海の中央よりやや西側に位置し、島の周囲約20km、瀬戸内海の多くの島と同様に山地がほとんどを占める、平地の少ない島である。豊町（ゆたかまちは、大崎下島の中央部から東部を占め、昭和31年に御手洗町、大長村、久友村（ひさともむら）の1町2村が合併してできた町である。御手洗は、豊町の東端に位置する集落である。

大崎下島は、室町時代末期までは伊予領（現在の愛媛県）に属しており、慶長年間（1596～1614）に安芸国の所領となり大崎下島と称されるようになった。

■御手洗・・・御手洗という名の起こりは、神功皇后が朝鮮半島に出兵のとき、この地で手を洗われたという伝承と、菅原道真が大宰府へ左遷され、赴く途中に立ち寄ったとの伝承がある。豊島とは、豊浜大橋で結ばれており、平成17年3月20日豊町と豊浜町は呉市と合併した。江戸時代初期には農耕地として開かれていたが、瀬戸内海航路の「沖乗り」の発達にともない、風待ち・潮待ち港として着目され、寛文6年（1666）に耕地を屋敷地にすることを許されると、大長や他国から人々が移住し急速に港町を形成していった。正徳3年（1713）に町年寄役、文化5年（1808）に町庄屋が置かれた。また、享保～宝暦頃（1716・1763）には若胡子屋（わかえびすや）等4軒の茶屋が公認され、町は歓楽街として賑わう一方、米や酒をはじめとする他国商品取扱いの特権も与えられ、諸国の廻船を相手に商業中継港としての機能を高めていく。また、薩摩、長州、延岡、宇和島藩等、九州四国のいくつかの藩は、参勤交代の際に御手洗に船宿を指定していた。御手洗が港町として急成長するにつれて、人口・戸数は急激に増加し、それにもなって土地の狭い御手洗は数度にわたって埋め立てられた。また、文政11～12年（1828～1829）には安芸藩の事業として御手洗の南端の千砂子磯に大規模な波止も築造された。

ところが明治になり、瀬戸内海航路に汽船が就航し本州に鉄道が整備されるようになると、御手洗は船舶の寄航が減少するとともに商業が次第に衰退し、かつての経済中心地としての機能を喪失するようになる。しかし御手洗は独立した町として踏みとどまり、港町としての生き残りをかけて、小防波堤、雁木、給水所・給油所等の港湾諸施設の整備を行い、機帆船の避難港として維持された。そして、大正3年には帝国水難救済会御手洗救難所が設けられた。その後、第1次世界大戦による好況を受け、寄港する船も増え、町の造船業も活況をみせるようになった。

また、昭和8～11年には町内全道路にコンクリート舗装を施した。昭和13年の記録からは、中継地として木造船用材木が西日本全般に渡って取引され、米・酒・醤油の日用品等は近隣町村の需要を満たしていたことが伺われる。しかし、昭和31年の合併後は大長が町の中心となった。保存地区内の伝統的な建造物は、18世紀前半から昭和初期にかけての、伝統的な瀬戸内の島の港町における各時期の建物である。

建築形態では、比較的間口が狭く奥行き長い妻入りの町屋と、棟割長屋に代表されるような平入りの町屋が多い。屋根の形態は切妻造が多いが、規模の大きい町屋には入母屋造や寄棟造のものもある。また、大正から昭和初期に建設された洋風建築が地区内に点在している。残存する洋風建築のほとんどは2階建、寄棟造、下見板張であり、壁の色は淡黄色や淡緑色等の明度の高い色である。このように年代的にも、形式的にも、平面的にも、様々な形式を有する建物が数多く残存しているのが御手洗の特徴である。

町並みは、風待ち・潮待ちの港町としての繁栄とともに変遷しており、大小の商家、茶屋、船宿、住宅、神社、寺院などが混在し、集落中心路、集落連絡路、集落生活路（小路）、路地等が埋め立てとともに、網の目のように巡っている。また大波止、石橋、高燈籠、石垣護岸、雁木等、港町の生活上必要な土木的建造物が当時のまま現存しているものもある。このように、御手洗は17世紀の中頃形成されて以来、江戸時代の約200年間を経て昭和初期に至るまで、瀬戸内海交通の中継港と

して、時代時代に応じた発展を示し、その痕跡を今も集落内に留めている歴史的にも文化的にも価値ある港町である。

※伝統的建造物群・・・南北500メートル、東西400メートルほどの狭い地域に540棟の建物がひしめく。うち203棟が江戸時代から戦前にかけての伝統的建造物である。平成6年に国が伝統的建造物保存地区に選定した。県内では製塩町の竹原市・竹原地区に次いで2番目である。保存地区に選ばれたあと、約70軒が屋根や外壁、軒先といった外観を修復した。中心部に近い「常盤町とおり」は電線やケーブルが目立たないようにした。江戸年間の材木商家は改築され、御手洗観光の拠点「潮待ち館」になった。初代の町年寄を務めた「柴屋」の旧本宅は4年がかりで修復が進み、遊郭だった「若胡子屋（わかえびすや）」跡も復元される予定である。家々の格子窓には縦70センチ、横45センチほどのすだれに竹筒をかけ、一輪挿しの花がいけてある。ハッサク、ラッパ草、マーガレット、フリージア、ジャスミン……。生け花で町を飾っているのは、「重伝建を考える会」の女性会員でつくる「さくら部」だ。「町並みに四季の彩りを」と始めた。地区内で花を栽培し、15人ほどで約60棟に花を挿して回る。

■御手洗の歴史

寛文6年(1666)	町屋敷割りを藩より許され、人家が建ちはじめる
正徳3年(1713)	町年寄り(大長村の統括下)が置かれる
宝暦9年(1759)	常盤町を中心とした大火(11月)
文化3年(1806)	伊能忠敬が御手洗を測量する(3月1~3日)
5年(1808)	町庄屋が独自に置かれる(初代柴屋)
文政9年(1826)	シーボルトが寄港する
11年(1828)	千砂子波止の築造(11~12年)
11~13年	住吉神社造営(大阪 鴻池善右衛門寄進) ※千砂子波止の築造以後、住吉町の埋め立てが進んだ
嘉永6年(1853)	吉田松陰が長崎行き途中に立ち寄る
元治1年(1864)	三条実実ら五郎が多田勘右衛門宅(竹原屋)に滞在する(7月22~24日)
明治12年(1879)	御手洗町が大長村より独立
昭和31年(1959)	1町2村が合併して豊町となる
平成6年(1994)	国選定 重要伝統的建造物群保存地区となる

☆島をあげての町並み保存運動・・・御手洗の町並み保存を推進するきっかけとなったのは、平成3年9月27日に襲来した台風19号の復興であった。最大風速37.7m、最高潮位5.0mの台風の被害は、床上浸水161戸、床下浸水314戸、家屋全壊26戸、家屋半壊15戸(豊町全域被害数)と惨状を極め、御手洗地区もまた、甚大な被害を蒙った。台風が襲った平成3年、「御手洗町づくり推進住

民委員会」が発足する。翌4年には、「豊町御手洗伝統的建造物群保存地区保存条例」が制定され、保存地区が決定した。そして、平成6年、「重要伝統的建造物群保存地区」として国の選定がなされた。同年、住民による「伝統的建造物を考える会」が発足し、町並み保存が推進されていく。

※御手洗の地理、建造物と埋め立ての推移・・・資料1, 2, 3参照 無人であったこの地に寛文6(1666)年、18軒が大長から移住した。寛文12(1672)年幕府の命を受けた河村瑞賢が西廻り航路を開いた少し前であった。沖行く船の数が増えてゆき、中にはこの地に寄港する船もあった。人家は延享4(1747)年83戸、明和5(1768)年106戸・543人、天明3(1783)年241戸・1190人、享和元(1801)年302戸・1570人、嘉永6(1853)年1659人と、目覚ましい勢いで増えた。人口の増加に伴って新地の造成、拡張の工事を2度にわたって行っている。正徳・享保年代には、恵比須神社前に大雁木が設けられ、更に明和7(1770)年には幅10間の大雁木に修築され、頻繁に寄港する船舶に対応できる港として整備された。文政11(1828)年から1年を費やして、千砂子波止(ちさごはと)を築き、この付近の暗礁による座礁が解消され停泊船舶が増加した。続いて、天保10(1839)年までかけて、恵比須神社から住吉神社までの海岸を埋め立てて町並みの区画を拡大した。

また、広島藩は天保元年には他国船の誘致にむけ、海岸沿いの民家の草葺き屋根は全て取り除き、海岸線の埋め立てによる瓦葺き屋根の新築を命じて、環境の改善を図った。

蛭子神社付近は荷揚げ場となっていて、竹原屋など問屋層の居住区であり、山際に住む近隣各地からの、港湾労働の日雇い者たちを傘下におさめていた。

☆他國中継ぎ商業への展開・・・御手洗が天然の良港として商船や西国大名の船の寄港が活発になるに連れて、船宿業はそれまでの航行中の生活必需品の補給、上陸した際の宿泊の世話、などから廻船を相手にした積荷の取引業が活発に行われるようになった。18世紀になると中継の商業、すなわち、他国の船を相手に、他国商品を他国へ仲介する取引業が活発化した。西国諸藩から船宿に指名されたのは、延岡藩が竹原屋、熊本藩が岩志屋・脇屋、小倉藩が竹原屋、後に筑前屋、宇和島藩が村内屋・竹原屋などで御用商人として諸藩の米や特産物の販売を請け負った。

竹原屋は延岡藩の資金調達に応じ、藩の借財の肩代わりまでするほどになった。竹原屋の残した「竹原屋客船帳」によれば、享和元(1801)年以前から安政4(1857)年までに取引した船は1247艘にたつする。地域別では、畿内127艘、山陽7カ国512艘、北国・山陰16艘、四国389艘、九州149艘ときわめて広範囲な交易を行っている。

資料4 によれば、天保10年の他国商品の買い入れ額では米穀が最も多く、71%を占め北国、九州、瀬戸内からの廻船から買い付けている。広島藩では領内の米穀統制を実施して、宮島、尾道、御手洗以外では他国米の取引ができなかった。また、春から夏にかけては北国米、秋から冬には瀬戸内米・九州米を扱った。北前船の入港は天候に大きく左右され、一度に50艘、100艘の入港があると取引の銀の不足を招いた。他国船への転売の相手は、土佐・讃岐・大洲など太平

洋側の諸国が主流であったが、他に御手洗町内や近在の島々の漁師や浜子（塩田労働者）への飯米供給分があった。

■御手洗天満宮・・・延喜元（901）年、菅原道真が太宰府に左遷された時、船をこの地に寄せ、笏（しゃく）で地面を掘ったところ清水が湧き出たので、口をすすぎ、御手を洗われた所と言われている。宝暦5（1755）年に天神社として創建され、明治4年（1874）広島藩士の寄進により現在の場所に新社殿が造営された。現在の社殿は大正6年に町民の寄進により再建された。境内には菅原道真の歌碑や菅公のゆかりの井戸や筆塚、硯がある。願いを込めて潜り抜けると、良いことがあるといわれる「可能門」がある。この付近には江戸時代から水質のよい井戸があったので、早くから人家が建った。

歌碑

「我たのむ 人むなしくなすならば 天が下にて 名をやなかさん」

（私は願う 人の讒言をいう人は やがて天の裁きを受けるであろうことを）

■金子邸・・・慶応3（1866）年11月、長州軍と芸州軍が御手洗で合流し倒幕のための御手洗条約が結ばれた場所である。広島藩は、第一次長州征伐の際は先鋒として働いたが、第二次征長時には中立的態度を取った。どちらかというと旗色不鮮明であったが、幕末もぎりぎりになって既に同盟を組んでいた薩長と手を握り討幕運動を進めた。慶応3年の11月というと長州藩は如何にして大軍を京都に上らせるかに腐心していた時期である。長州藩軍勢は約定通り御手洗に来着。広島藩軍もこれを迎え、ここに両軍が集結した。金子邸にて条約を締結し、長州藩軍は、芸州藩の軍勢に守られるように攝津西宮に上陸を果たした。



■若胡子（わかえびす）屋跡（県史跡）・・・老朽化のため現在は見学できない。若胡子屋は、周防上関から御手洗へ遊女商売の出稼ぎを行っていて、享保9年（1724年）には茶屋営業許可を広島藩より受け店を構えた。若胡子屋跡は、この時期に建てられたものと考えられ、御手洗で最大規模の町家だった。主屋の座敷の天井には屋久杉を使用し裏庭には桜島の溶岩を練りこんだ土塀が見られるなど贅を尽くしている。明治

17年（1884年）、寺に転用され、その際に2階部分が取り払われたが仏壇部分の小屋組に一部再利用され現存している。4軒の茶屋に100名の遊女が、そのうち若胡子屋が40人を抱えて最も繁盛していたという。熊本藩の細川越中守などは一夜千金のお金をおとしたたといわれている。又、オランダ商館のフィッセルも此処、若胡子屋の酒席に列席したと日記にのこしている。遊女たちは江戸の吉原や京都の島原と同じように高い教養もそなえていた。遊女の生活に耐え

かねて逃亡しようとしても、海に囲まれた島のこととて、容易には成功しなかった。また上関から質流れとして、女子供30余人を湯女として連れて帰って来たとの記録がある。泊まり船の間を縫うように、宵闇の海にカンテラを灯して漕ぎ廻る”おちよる舟”、遊女を乗せ、船乗りの一夜妻を勤めた。古くは舟に食料品や薪、水などを売る”菜売り女”が”舟にて後家商い”をしていた。これが職業化した。

御手洗は付近の島々の中でも、古くから遊女の島として船人たちに広く知られ、彼らの旅情を慰めてきた所。北前船(千石船)や四国九州の諸大名の参勤交代の時、オランダ商館長の江戸参りの途中など、彼女らの働きは、諸国の船を引き付けただけでなく、稼いだお金は、御手洗が負担しなければならない諸経費や、商売の資金として当てられた。

※若胡屋の帳簿の中に以下の記録がある・・・「例年のごとくオランダ商館員たちは江戸へ向かいました。文化11年(1814)1月23日、御手洗に立ち寄った彼らは、長崎の丸山遊郭で遊び慣れているのでしょうか、何のためらいもなく若胡屋へ赴きました。金2両を支払い、遊女5人・芸子5人と遊興に耽りました。翌日、彼らは慎み深い人間になりすまし、隣の大長集落にある宇津神社へお参りしています。昨夜のことなど忘れてしまったのでしょうか。」

■松浦時計店・・・レトロ調の赤時計の看板が目印になっている、明治時代創業の時計屋。約70年前に造られたSEIKOの懐中時計を模した看板。店内には150年前の創業時から休まず時を刻んでいるアメリカ、アンソニア製の大時計もある。家を一軒売って購入したという。日本で一番古い時計屋といわれる。

■乙女座・・・昭和12年、御手洗に劇場がなかったことから乙女座の建設を計画。その建物は建築の粋を集めたモダン劇場として一際目立った。戦後は昭和30年代まで映画館として親しまれ、その後は選果場に転用されたが、平成14年3月、現在の形に復元された。



■江戸みなとまち展示館・・・江戸時代潮待ちや風待ちをする船で賑わい栄えた港町「御手洗」。どのようにして誕生したのか、どんな町だったのか、どんな文化が育まれたのか…。人々の「交流」をテーマに船運で盛んだった「交易」、娯楽文化を中心とした「交遊」、幕末の志士や外国人との「交歓」の3つの視点から御手洗を紹介している。

○「乙女座」と「江戸みなとまち展示館」は建物の中が繋がっている

る



■恵美須神社(県重要文化財)・・・元文・寛保年間(1736～43)に豊前小倉からご神体を移してきたと伝わる。当初は小さな祠だったが、宝永4(1707)年に社殿の改築、元文4(1739)に拝殿が新築された。現在の社殿は明和元(1764)年に改

築された。恵比須は蛭子、恵比寿などとも表記し、えびっさん、えべっさん、おべっさんなどとも呼称される。七福神の一柱。狩衣姿で、右手に釣り竿を持ち、左脇に鯛を抱える姿が一般的。商売繁盛の神様として御手洗でも崇められている。参勤交代の途中には必ず代参が遣わされたと言う。御手洗に立ち寄る船乗りたちは、ここで航海の安全と順風を祈願した。また、御手洗の繁栄を願い、境内では毎年春・秋に芝居が興行され、大坂など各地から一座が巡業にやってきた。天明8（1788）年から高札場も設けられ、町一番の繁華な場所となっていた。明和（1770）年には幅10間の大雁木に修築され、御手洗において最大規模のもので、ここが船の乗降場となり、船宿（積荷の取引業・生活用品の供給・宿泊の世話）や茶屋（接客業）が瀬戸内各地から移住してきた。宝暦11（1761）年から祭日には神輿の行幸が行われ、茶屋がその経費を賄い、若者たちが勇ましく壇尻を引き回し、遊女・芸子たちが熱い声援を送り、各地からの見物客で賑わっていた。現在は社殿と鳥居のあいだには県道が通っているが、夕日が沈む頃、海に向かって鳥居を抱き、好きな人の名を叫ぶと愛がかなうといわれ「縁結び」のご利益があると若い人に人気がある。

■七卿落遺跡・・・文久3年（1863）の8月18日に、日本全土に広がる尊皇攘夷や開国論争の中で、長州を始めとする他の尊攘派と提携していた三条実美ら七人の公卿は、公武合体を主張する権勢に押された上に朝譴（ちょうけん・おとがめ）を蒙り、宮中に参内することも、他出することも、他人との面接も一切禁じられるという厳罰を受けた、いわば朝廷における一大事件であった。

七卿とは、三条実美・三条西季知（さんじょうにし すえもと）および四条隆謨（しじょう たかうた）・東久世通禧（ひがしくぜ みちとみ）・壬生基修（みぶ もとおさ）・錦小路頼徳（にしきこうじ よりのり）・澤宣嘉（さわ のぶよし）。七卿は長州勢とともに、文久3年（1863）8月、いったん長州へ下向。20数艘の船と、総勢4百余人の大船団であった。23日夜（午後8時頃）都落ちした七卿は千石船の出入りする鞆の港に投錨、下船し上陸。保命酒屋・大田家で憩い、同夜半強風をおして出航し翌24日午後、糸崎八幡浦に避難した。七卿は長州兵に護衛され、三田尻の招賢閣で歓待を受けた。その間に錦小路頼徳は病死し、沢宣嘉は生野の変〔文久3年（1863）10月に但馬国生野（兵庫県生野町）において尊皇攘夷派が挙兵した事件〕に参加して一行を離れたので、七卿は五卿に減少していた。五卿は翌元治元年（1864）7月13日、再び上京の途についた。しかし、途中長州勢が蛤御門（はまぐりごもん）の変に敗れたことを聞き、急遽長州に引き返すことにし、22日鞆（とも）で軍議を行い、西風激しい中を23日御手洗に着き、ここで順風を待つために豪商・多田家にはいつて1泊し、翌日長州上の関へ向って出発した。慶長3（1867）年、王政復古クーデターで朝廷に全員復帰。各方面の鎮撫総督に就任する等、朝廷の重要なポストを歴任した。



※七卿館（多田家住宅）（広島県重要文化財）・・・木造2階建て、

入母屋造り、本瓦葺きの建物現在は御手洗地区重要伝統的建造物群保存地区区内で、休憩所・資料館として整備されている。庄屋の多田家（屋号・竹原屋）の屋敷であり、昭和15年に御手洗町が買い取った。館内にあった多くの資料は、平成3年の台風19号により海に流された。七卿館には、オランダ商館のテーレマン・パクという人が駐在して薩摩藩などの密貿易をしていたこともあったという。文久3年（1863）から慶応元年（1865）にかけて、広島藩は軍艦購入のために薩摩藩から十両を借りて、その返済として米、鉄、銅、操綿などを御手洗で渡していた。これ

を御手洗交易と称する。

屋敷は明治末期に古材を利用して建て変えられた。敷地は東の主要な部分が県道のために削られて元の形態を失っている。塀と門は20世紀中ごろに整備された。古い部分は8畳間と仏壇まわり、と縁のみである。

幕末の御手洗に関連する歴史

文久2(1862)年 和宮が14代将軍・徳川家茂に降嫁する

3(1863) 徳川家茂は攘夷決行を5月10日とする

” 長州藩は5月10日以降、下関海峡を通過する外国船を攻撃する

” 8月18日の政変で三条実美など七卿は朝廷を追われ、長州へ下る

元治元(1864)年 7月 三条実美など五卿は入京をめざす

” 7月 禁門の変で長州軍は薩摩・会津藩などに敗れ五卿は御手洗を経由して長州へ下る

” 8月 長州藩は4カ国から攻撃される

” 長州軍は御所に発砲したことで朝敵となり幕府は長州征伐を表明するも、長州が藩主の謝罪や五卿の大宰府への移転などで、12月に戦火を交えずに幕府に恭順した

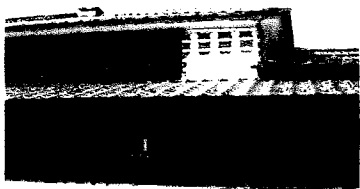
慶応元年(1865) 長州藩は高杉晋作ら倒幕派が実権を握る。

2 1月 坂本龍馬の斡旋で薩摩藩と長州藩が同盟する

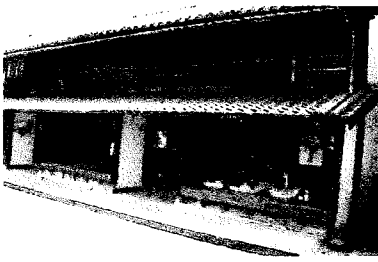
” 6月 再び長州征伐が行われ、家茂の死で終結する

3 11月 御手洗の金子邸で長州軍と芸州軍が合流し同盟する(御手洗条約)

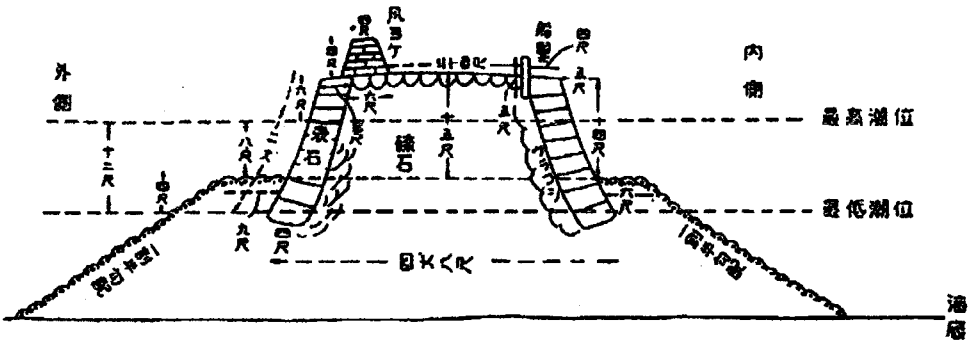
■**軀田邸**・・・二階の壁の一部は「なまこ壁」、母屋の屋根は寄せ棟浅瓦葺きで、町内の町屋の屋根とは趣が異なる。幕末に建てられたと思われるこの屋敷は、江戸末期に、海産物、穀物問屋から軀田家が買い取ったもの。建物は非常に保存がよい。御手洗では規模の大きな町屋のひとつ。母屋の裏には広い庭園を配し、土蔵、湯殿、二棟の離れ座敷を構え、渡り廊下で結ばれている。また、大正末期に建てられた木造の洋館が別宅として使われている。この別宅で昭和11年に野口雨情作詞・藤井清水作曲の「御手洗節」が創作された。なまこ壁は、壁面に四角い平瓦を並べて貼り、【めじ】と呼ばれるその継ぎ目に漆喰(しっくい)をかまぼこ型、海鼠(なまこ)状に盛り上げて塗ってある点が特色。



■船宿・・・海沿いにある三軒長屋のかつての船宿。船宿とは、その藩内の年貢米や特産物の売りさばき、借財の用立て、御用船乗組員の世話、大坂蔵屋敷などへの書状の仲介といった御用商人の役割を引き受けていた。また、一般の間屋・仲買と同じように各地の商船とお得意になって手広く取引をおこなった。この船宿のうち、若本屋は慶応3（1867）年に大洲藩の船宿に指定されたという記録が残っており、宇和島藩の船宿も兼ねていた。両藩の家紋をあしらった御用看板が表に掲げられていた。建物の造りは切妻造本瓦葺き平入の長屋。建築年代は文政期頃（1818～30年）と推定されている。二階に宿泊できる部屋があった。現在ここでは御手洗最後の船大工、Mさんに出会える。Mさんは台風により船大工の道具を失い、現在はミニチュアの木造舟（オチョロ舟・昔、遊女を沖の船まで乗せて運んだ舟）を造っており、訪れると気さくに話をしてくれる笑顔に出会える。御手洗で名をはせた遊女の写真を見ることができる。



■千砂子波止（ちさごはと）・・・文政11～12年（1828～1829）に、広島藩によって「中国無双」の大波止として築かれた大防波堤。当時、中国地方で最大の大波止であった。御手洗港は、大きく北側の内港と南側の外港に分けることができる。しかし、もともとは北側の恵美須神社前付近が港の中心で、恵美須神社の前には現在でも一番大きな雁木がある。雁木は最大の船着場かつ物揚場だった。恵美須神社前の海面は波浪が高くこれを防ぐために千砂子波止が築かれた。以後千砂子磯



と呼ばれた暗

礁による船座礁が解消され、碇泊船数が増え、御手洗の新たな南港となった。波止の根元の石積みには、永遠の繁昌を夢見て鶴と亀が刻まれている。高灯籠は灯台の役目を果たし高さは6.18mで、当時の繁栄ぶりを現代に伝える歴史の証だ。当時の庄屋・三笠屋忠左衛門が寄進したものである。千砂子波止の築造によって、港の主要機能はしだいに住吉神社前の南港に移っていく。波止によって南風でも住吉神社前での停泊が可能になったためだ。

千砂子波止は御手洗港で最大の工事で、富くじ興行をして資金を調達した。石工、大工は広島城下から集められた。当時の築堤技術の高さを示すものといえ。海岸線の埋立に加え幅10間の大雁木もつくられた。ただし現在はコンクリート製の階段と、住吉神社前の石貼りによる階段状の施設に変わっており、当時のものではない。



海岸線の埋立は、波止の築造に続いて天保10（1839）年まで10カ年を費やして恵美須神社前から、住吉神社にかけて行われた。

『高灯籠』は千砂子浜の目印で3里先から確認出来た

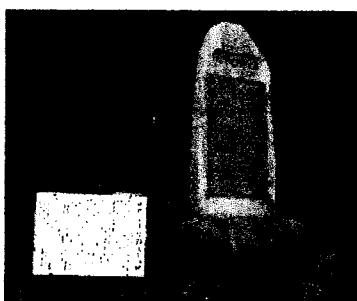
■住吉神社（広島県重要文化財）・・・千砂子波止の鎮守として、また海岸線を埋め立てて新しく出来た町の氏神として文政13（1830）年に建立された。広島藩勘定奉行・筒井極人が大坂の豪商・鴻池善右衛門へ神社寄進を依頼し、ほんの座輿の話が思いがけず実現したという逸話が記録に残されている。本殿は、大坂の住吉神社を2分の1の大きさにかたどったもので、懸魚や破風の金具に至るまでそっくり真似ている。



『住吉神社の太鼓橋』

神社の部材は大坂で木造されて、わざわざ船に乗せられここで組み立てられた。拝殿は入母屋造の様式を備え、御手洗の人たちの寄進によって建立された。境内の石灯籠・狛犬・手水鉢なども町内をはじめとする各地の有力商人から寄進されていて、大坂鴻池家ゆかりの豪商たちの名前や遊女の名も見つけることができる。境内の埋め立てでは、茶屋若胡子屋・藤屋・堺屋・扇屋の遊女たちが衣装を替えながら接待を行った。遷宮式でも、遊女たちが花魁道中を行い竜宮城の乙姫・官女・浦島太郎を演じるなど、住吉神社の造営事業に彩りを添え、各地から見物客が押しかけたという。玉垣に刻みつけられた源氏名の数々を見れば、住吉神社造営に賭けた遊女たちの献身ぶりがうかがえる。

■星野文平の碑・・・星野文平（1835～63）は御手洗の医師の家に生まれ、江戸幕府学問所・昌平黉で学んだ後、広島藩学問所の教授として仕えた。幕末期の政治運動の高まりのなかで、尊皇攘夷思想に影響を受け、脱藩上京して政治活動に身を投じようとしたが、藩士教育に当たるよう差し止められたため、それに憤慨して自刃を図った。幸い一命を取り留め、上京を許されることになった。軍備増強を進める広島藩は、蒸気船購入のため勝海舟との交渉に臨んでいた。ところが、文平は自刃未遂のときの傷口を悪化させてしまい、その任務を果たせないまま若くして亡くなった。その後、勤王の志士として讃えられ明治24（1891）年に明治政府より正五位を授けられた。



■南朝山 満舟寺・・・縁起によれば、平清盛が上洛の途中にこの付近で嵐に遭い、一心不乱に祈りを捧げたところ晴天となり、そのお礼として草庵を建て、行基の十一面観音を安置したという。確実な記録によれば、享保3（1718）年に観音堂が建てられ、各地からの廻船の寄進により18世紀半ばまでに寺としての規模を持つまでになった。しかし、新寺建立が禁止されたいたため、豊



田郡納所村（現三原市）の無地無住寺であった浄土宗松桂庵の寺号を貰い受け、真言宗への転宗と寺号の改称の許可を得て、ようやく正式な寺として認められた。境内には、本堂と観音・住吉・金毘羅の神々を祀る三社堂、それに鐘楼が残っている。本堂の額は、琉球使節に随行していた中山楽師・梁光地が揮毫し、それを住持と栗田樗堂（伊予俳壇の指導者）が掲げたもの。なお、この巨大な石垣（市有形文化財）は豊臣秀吉の四国攻めの際に、毛利軍（小早川水軍）が前線基地として築いた城跡とも、加藤清正が築城したともいわれている。しかし、何ら城跡に関する伝承がなく、いまだに謎に包まれた石垣である。豊臣秀吉の四国征伐の際の前線基地として伝えられ、戦国時代の城の特徴である「乱れ築き」の立派な石組が圧巻である。当時は間際まで海であり、地下には石垣がまだ続いているといわれる。平成10年から2年かけて積み直した。宝形屋根の本堂は昭和初年の再建。

琉球（沖縄）使節の筆跡満舟寺額

嘉慶12年丁卯春（中国清時代の年号）琉球の使節が將軍の代替わりを祝う途中度々停泊。

◆書「嘉慶十二年丁卯季春／満舟寺／[球陽]中山楽師梁光地」・1806（文化3）年の謝恩使の楽師・梁光地

が、翌年二月、江戸からの帰途に御手洗を通った際に作成した。

◆扁額「嘉慶十二年丁卯季春／満舟寺／球陽中山楽師梁光地」（裏面、略）[写真]・上記の書を扁額に仕立てたもの。俳人の栗田専助が寄進し専助の没後文化12（1815）年に第七代権大僧都が本堂に掲げた。



■誰彼塚（たそがれつか）・・・御手洗連中と呼ばれるほど俳諧が盛んな土地柄で、伊予俳壇との交流も活発におこなわれていた。寛政5（1793）年は芭蕉百回忌に当たっていて、芭蕉を偲んで各地で建碑運動が取り組まれた。この誰彼塚（翁塚）も一般に芭蕉塚といわれているもの。芭蕉塚は広島県内でも十数カ所しか存在しておらず、住民の文化的関心の高さがうかがえる。芭蕉の句の一つ「海くれて 鴨の声 はのかに白し」が刻まれている。芭蕉は当地へは来ていないという。



■亀趺墓（きふばか）・・・台座が亀の形をしているという珍しいもの。この亀趺（きふ）墓は、江戸時代中期に建立されたものとされている。亀趺は、中国では1500年以上も前から用いられたとされ、現在も中国の石碑にはよく見られる。日本では、江戸時代に伝わって以降大名家が使ってきた（水戸・徳川家、鳥取・池田家や岡山の池田輝政の墓、岡山では墓前碑を亀趺にしているのは、輝政のみ）が、大名家以外

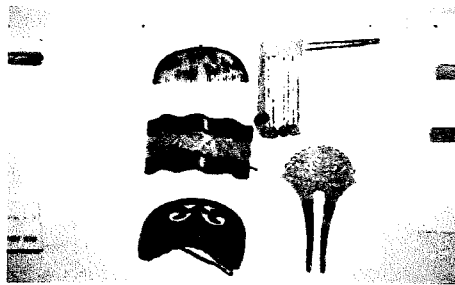
の墓に利用されるのは極めて少なく、この満舟寺の亀趺墓は、全国でも最古級のものとして貴重とされる。墓の基部に亀が使われる場合、亀にはよく耳がついていたり、尾がついていたりして本当にこれが亀かと疑問が出てくるような形状をしていることが多い。神の使いとしての亀は、実物とは異なり、獣のような頭を持つ霊亀（れいき）とされていることからこのような姿なりをしている

そうだ。霊亀には、頭を高く持ち上げる、六角形の亀甲紋を刻むなどの特徴がある。亀跌墓には、亀の台座の上に屋根のついた角柱の墓がのることが多い。



■栗田樗堂（くりたちょうどう）の墓・・・栗田樗堂（1749～1814）は松山城下の酒造家に生まれ、大年寄を長年勤めていた。小林一茶の来訪もうけるなど伊予俳壇の中心的存在だった。享和2（1802）年に公務を退いて剃髪し、養生かたがた御手洗へ移り住み、恵比須神社付近に居を構え、二畳庵と呼ばれていた。樗堂に指導された御手洗の俳人たちは、自分の句集を世に送り出せるまでに育っていった。彼らは樗堂の代表句集「萍窓集（へいそうしゅう）」や追善集「都々鳥集」の編集に尽力した。樗堂から一茶へ送られた絶筆の書簡が、そのまま一茶の作品「三韓人」に載せられている。樗堂の死は御手洗の人のみならず、全国の俳人にとっても大きな悲しみだった。この墓に彫られた字は樗堂のものであるといわれている。

■おいらん公園・・・町でにぎわった昔、最盛期には300人を超える遊女らが御手洗の繁栄を支えた。おびたしい数のその墓が、平成8年に地区の急傾斜地の工事中に見つかった。古くは享保15（1730）年頃から江戸時代末期に至るまでの遊女・童子それにかかわる人たちの墓標が百基余り並んでいる。地域の人々を始め島外からの多数の人々の善意によって、平成15年に海の見える風光明媚なこの地に整備されたもの。



『遊女の櫛・笄・かんざし』

■常盤町とおり・・・18世紀のはじめ頃に埋め立てによって出来た町である。江戸から明治初期の町並を最もよく伝えているのが、常盤町の一帯である。ここが、御手洗の重伝建のメインの通りであり、街並みの連続性の一番感じ取れる地域である。切妻または入母屋造りの白漆喰の塗込めの妻入り家屋が並

んでいる。二階には大きな木格子の窓が付けられている凝ったつくりの家屋もある。妻入りの白壁の町家である潮待ち館（旧大島材木店）は、観光案内所として活用されている。これは、平成8年度に修理された家を住民有志が借り上げ（平成12年）、観光案内窓口・土産物売り場・文化活動の場として使っている施設だ。通りのはずれに旧柴屋住宅があって内部の拝観が出来る。

■旧柴屋住宅・・・大長村庄屋役及び、御手洗町年寄役を代々勤めた高橋家（屋号柴屋）の別宅の一部。建築年次は、文化3（1806）年に、伊能忠敬が大崎島の測量をした時に宿舎にしたと伝わるので、それ以前と見られる。別宅は、2つに別れていて、本住宅が向座敷となっており、常盤通りを挟んで向かいが母屋だった。「伊能忠敬御手洗測量之図」の右側にこの向座敷が描かれており、土塀で囲まれた広々とした庭には、あずま屋や池が配され、豪華な造りとなっていた。広島藩主が遊覧のため来島した際にここで休憩しており、本陣として利用されていた。



幕末に、大長村の菊本伝助が買い取って今でも「菊伝」の愛称で親しまれている。外観は、間口四間、妻入り、塗り込め造り、本瓦葺きである。「みせ」「中の間」「座敷」が一行に並ぶ形式で、座敷と土間の間に、一間の幅の「あがりはな」が奥まで延びる。御手洗でも数少ない大規模な町家である。屋敷は旧豊町に寄贈された後、4年がかりで修復が進められた。土蔵には「伊能忠敬御手洗測量之図」など、伊能忠敬の測量に関する諸資料が展示してある。写真は『屋敷の内部』

※ 「伊能忠敬御手洗測量之図」（呉市有形文化財）・・・文化3年（1806年）2月30日～3月2日にかけて、伊能忠敬が御手洗の柴屋種次宅に宿泊し、大崎下島の海岸線の測量を行った。この図はその様子を描いた絵図である。



「御手洗測量之図」（部分）

伊能忠敬が全国測量図を作成した様子を描いた実写図は、全国で2点に過ぎないといわれている。もう一つの実写図（「浦島測量之図」，呉市入船山記念館寄託，呉市指定有形文化財）では、伊能忠敬自身の姿を特定することができず、本絵図が唯一その姿を描いている点で貴重なものだ。

☆伊能忠敬・・・上総（かずさ）国山辺郡小関村（千葉県九十九里町）に生まれる。18歳で下総（しもうさ）国佐原の伊能家へ婿養子に入る。没落しかけていた酒造業を再興し、米の仲買いなどで財を築き、郷土のために尽くした。50歳で隠居すると江戸に出て、19歳年下の高橋至時（よしとき）について天文学を学んだ。55歳（寛政12年、1800年）から71歳（文化13年、1816年）まで10回にわたり測量を行った。まず北边防備の必要から、幕府の許可を得やすい蝦夷地（えぞち）南東沿岸の測量を出願して官許を得た。寛政12年（1800）期待したとおりの成果を収めたが、その後全国の測量へと発展し、文化13（1816）年に終了するまでに、10次にわたり、延べ旅行日数



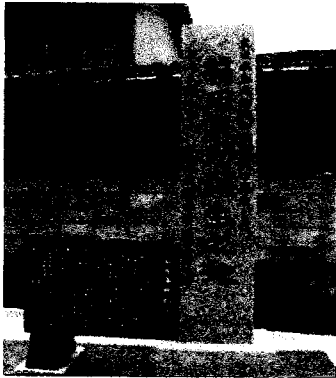
3736日、陸上測量距離4万3708キロメートル、方位測定回数15万回という大事業となった。忠敬の得た子午線1度の長さは28里2分(110.75キロメートル)で、現代の測定値と約1000分の1の誤差しかない。こうして作られたのが大日本沿海輿地全図(だいにほんえんかいよちぜんず)であり、大変精度の高い日本地図として評価された。完成したのは忠敬が74歳で没した3年後の、文政4年(1821年)であった(仕上げ作業を担当したのは高橋至時の子、高橋景保)。

☆榎本武揚と伊能忠敬・・・5回目の測量は、文化2(1805)年から、東海道から、紀伊半島・中国地方の測量をした。御手洗へ訪れたのは文化3年であった。文化4年、備後国安那郡箱田村(現在福山市神辺町)の庄屋・細川家の次男・細川良助は17歳のとき伊能忠敬の内弟子になる。6回目に四国を測量した後、7回目に山陽道から九州の測量にとりかかった。この時の、文化6(1809)年11月27日に神辺西本陣に泊まり、このとき、菅茶山が伊能を訪ね、伊能のために漢詩を贈っている。また、1810年には、細川良助の親の家(良助の生家)を宿にしている。このときから細川良助は地図作りの測量に正式に同行するようになった。

文政4(1821)年、50両をはらって、女子しかいなかった榎本家の養子になり、榎本姓を名乗る。箱田良助は、百姓の子どもだったため、最初は菅茶山の遠縁にあたるかといっていたが、結局菅茶山の弟だということで話がまとまった。

学問に情熱を傾けていた箱田良助は、榎本園兵衛に名前を変え、このころから幕府の要人となり、幕府天文方として仕え、さらに弘化元(1844)御勘定方として活躍する。榎本園兵衛の二男として生まれたのが榎本武揚である。

榎本武揚は、オランダに留学後、幕府海軍の実質的なリーダーとなり、大政奉還後は、幕府艦隊を率いて新撰組と共に函館五稜郭に立てこもった。敗北後は類まれな外交術、政治手腕により明治政府において重用された。内閣制度の成立後は能力を買われ6度の内閣で連続して、逓信大臣、文部大臣、外務大臣、農商務大臣を歴任した。



『榎本武揚の曾孫によって建てられた石碑』

◎当小冊子の作成には以下の資料を参考にさせていただきました。文責・種本実

「瀬戸内海劇場・御手洗自治会編」、「ゆたかまち豊町の観光と農業・豊町編」、「広島県豊田郡豊町御手洗地区保存再開調査報告書・1992・豊町編」、「瀬戸内海島嶼部の独自性と周辺地域との交流について・岡山商大社会総合研究所報・第23号2002年10月」その他、下蒲刈島、御手洗に関するホームページ

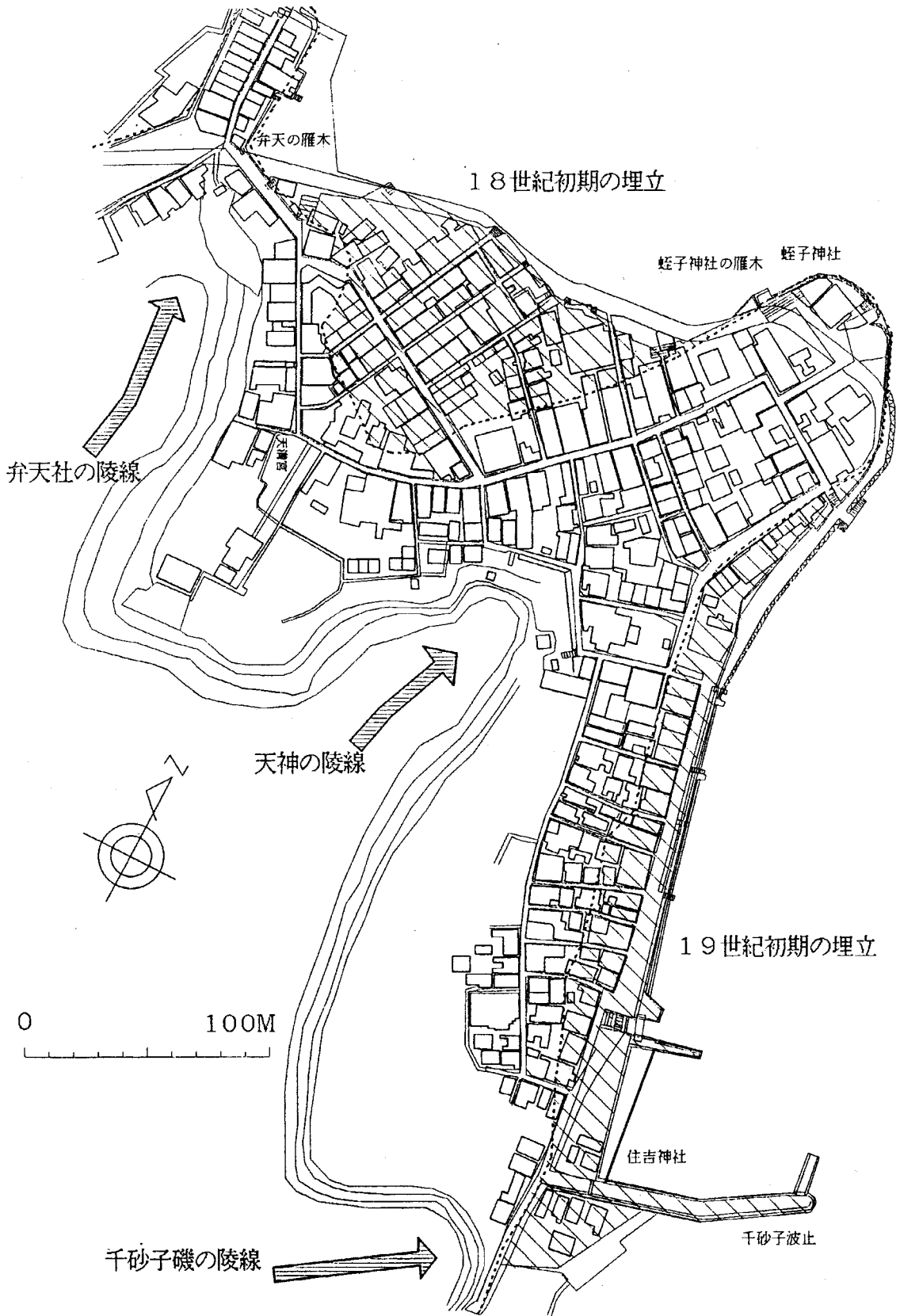


図 1 3 江戸時代の埋立 - P22 -



図 10 施設の分布 - p23 -

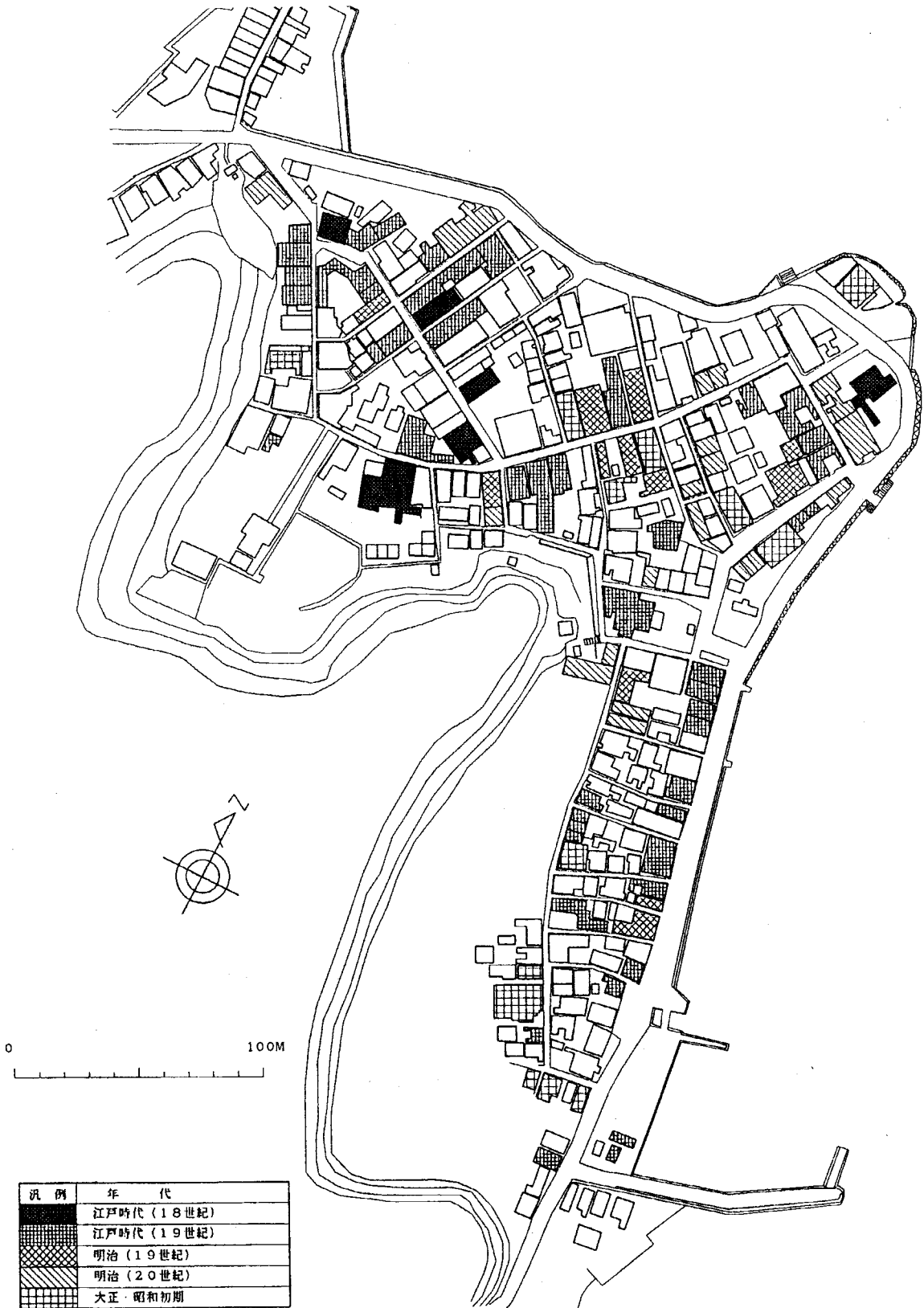


図1 1 建築年代区分 -P24-

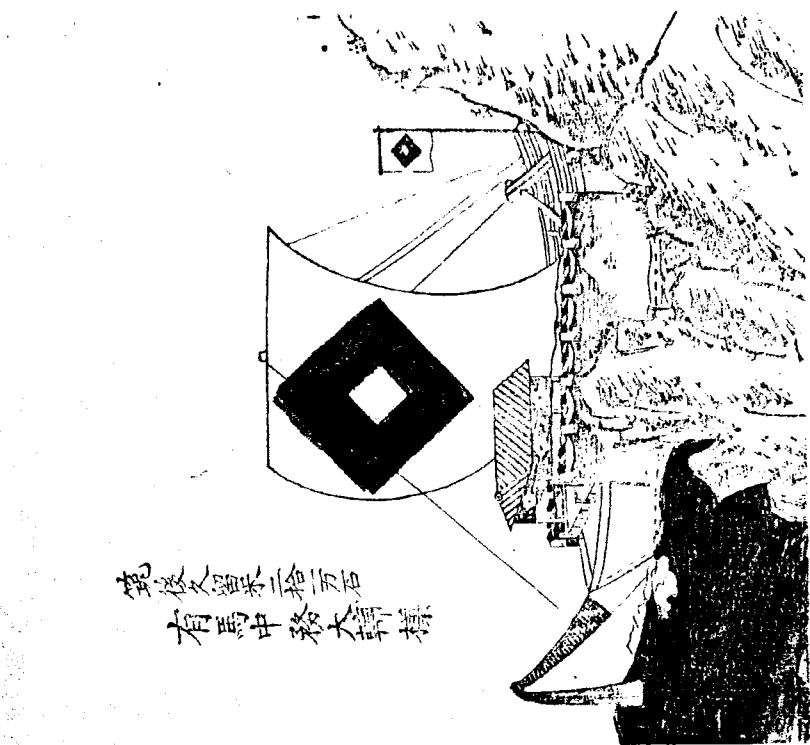
瀬戸内海島嶼部の独自性と周辺地域との交流について(土井・村上・三好・岡島・菅田・佐藤)

表6 御手洗町の他国商事の概況(天保10年)

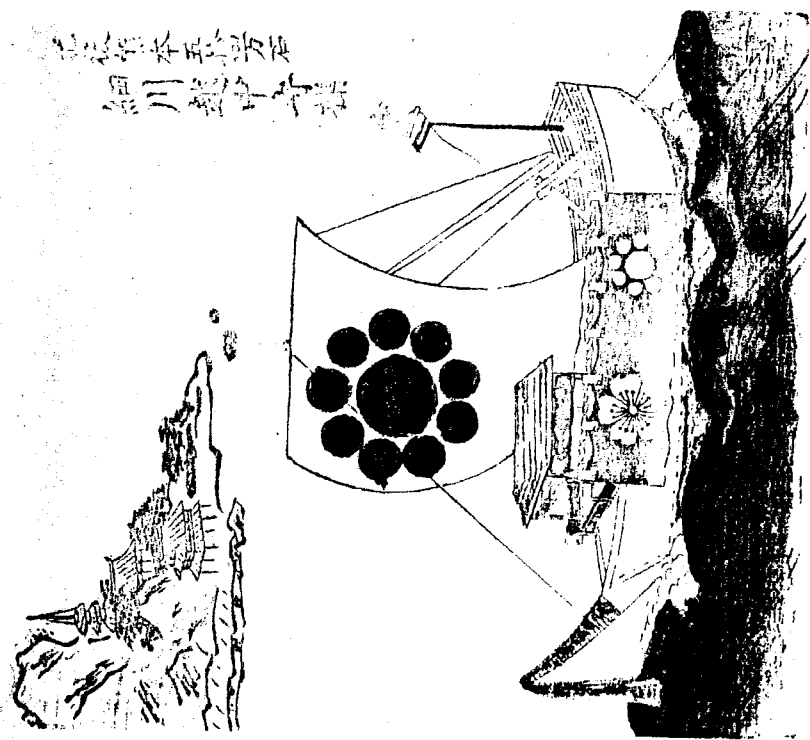
商品	他国より正銀にて買入			他国へ正銀にて売払			領内へ藩札にて売払			備考
	数量	銀高	買入先	数量	銀高	売払先	数量	銀高	売払先	
米 (雑穀)	石 17,000	貫 (1172.414)	北国・肥前・豊前・上門・ 周防・伊予・備前・備中	石 11,200	貫 (772.214)	土佐・日向・讃岐・大洲・ 宇和島・上ノ関	石 5,800	貫 (410)	町内、近辺島々、領内等の 飯米用として	領内を 広島より 取り寄るが それ以上は なく 同上
酒	丁 3,500	(175)	大坂、播磨、備前、伊予、 ほか	丁 2,000	(100)	精廻船	丁 1,500	75	町内播屋用、漁師、近辺 島々	
干鰯		12	北国船の船頭・水主のはせ 荷					12	近辺島々	
たばこ		45	豊後刻たばこ・柴たばこ		30	精廻船その他		15	町内、漁師	
糸	箱 1,200	(48)	瀬目、小豆島	箱 500	(20)	精廻船その他	箱 700	28	町内、島々	
銅種		6	筑前					6	町内	
葉		8	大坂					8	町内	
かつし		90	土佐・日向		75	北国その他精廻船		15	町内仕出し屋廻船ほか	
ぶ										
砂	丁 250	(35)	肥前・大坂・讃岐	丁 200	(28)	北国その他精廻船	丁 50	7	町内職屋	
呉服	俵 56	25	京都・大坂		10	伊予地精廻船	俵 56	15	町内茶屋子供芸子	
藍玉		14.56	阿波					14.56	町内、島内組屋7軒分	
計		1,630.974			1,035.414			595.56		

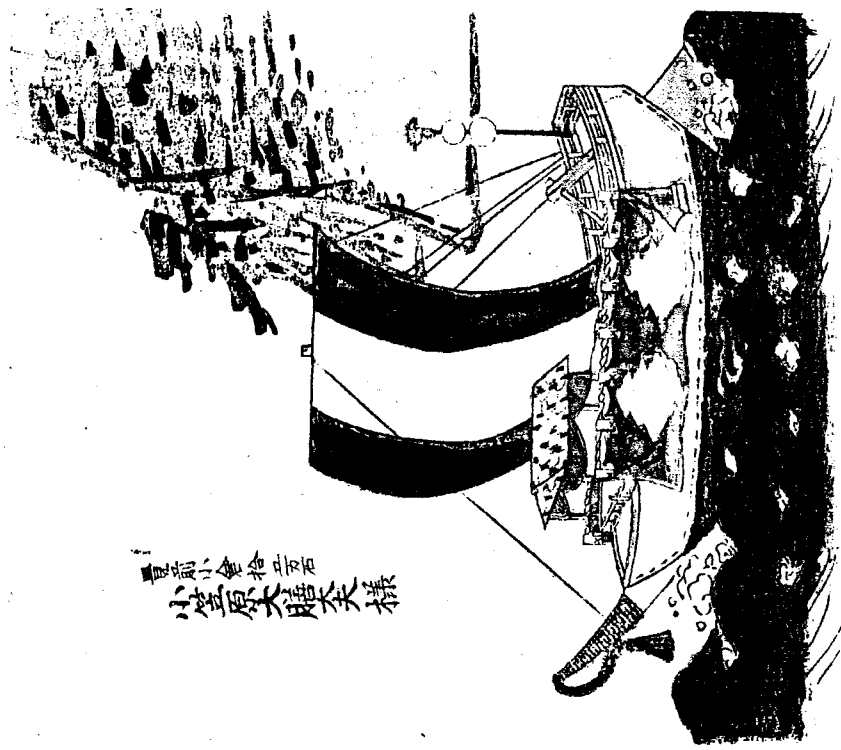
豊町役場蔵「他国と正金銀ヲ以買入候必要品申上書附」(天保10)による。なお、()内は計算値。

筑後久留米二拾万石有馬中務輔様の持船

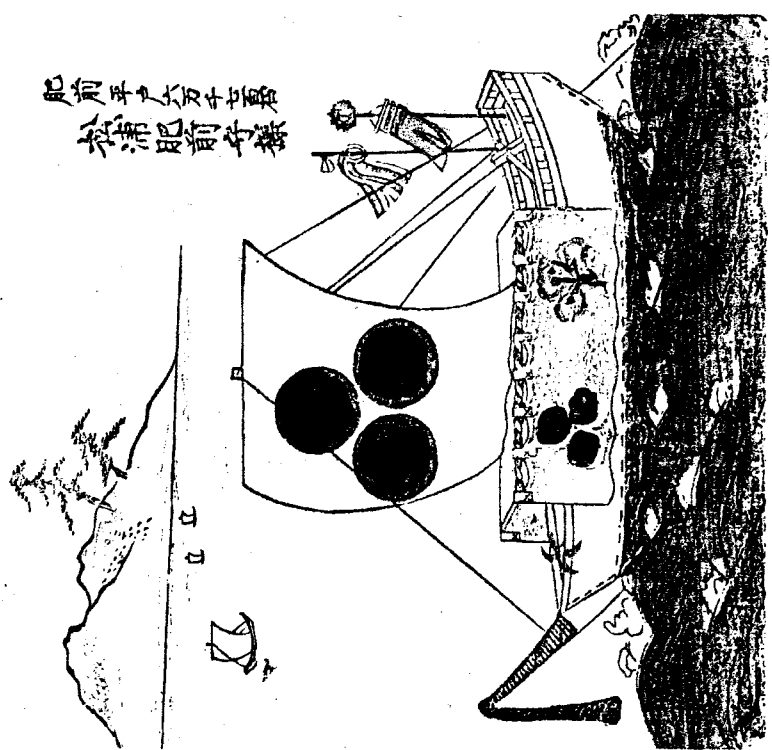


参勤交代で三ノ瀬寄港の大名持船





夏前小會拾五番
小宮原大膳天様



肥前平戸六万五番
松浦肥前守様

